

# 自分にしかできないことを



甲府一高は「バンカラで、紳士的なやつはいなかった」と小林喜光さん

多感な高校3年間は悲喜こももた。

「無駄な受験勉強ばかりしていた」とふり返るのは三菱ケミカルホールディングス会長で経済同友会代表幹事の小林喜光さん(69、1965年卒)。「自分とは何か」「人はなぜ生きるのか」と問い続けてきた。群れることが嫌いで、高校時代は部活動もしなかった。

本はよく読んだ。中原中也、太宰治、ニーチェら「破滅型が多かったかな」。文学部に行こうと思ったが、「精神的に追いつめられそう」と、理系を選んだ。

東京大学に進み、大学院では放射線化学を専

攻。当時最先端の研究をしていたイスラエルに留学もした。留学中、シナイ山へのツアーに参加したときのことだった。見渡す限り砂ばかりの灼熱の砂漠を、黒いシヨールをまとった女性がヤギを連れて歩く姿が動く点のように見えた。

「生きている、それだけですばらしい」。体に衝撃が走った。自問してきた少年時代からの悩みが吹っ切れた。「せつかくの人生、自分しかできないことをやろう」との思いを強くした。

三菱化成工業(現・三菱化学)に就職。2000年代前半には子会社の社長として、赤字続きの光ディスク事業を黒字化させた。

「高校時代は勉強するな。外れたっていい。人生は一直線じゃないんだから」

日本で最初に製薬会社向けに医薬品開発の支援業務を始めたシミックホールディングスCEOの中村和男さん(69、65年

卒)は、高校2年生のときに小林さんと同じクラスだった。「暗いやつだったんですよ。戦後の暗いエロ小説をみながら回し読みしていた」と笑い飛ばす。今も「よしみっちゃん」と呼ぶ仲だ。

科学少年で、ペンシルロケットやエンジン付きの模型飛行機を夢中になつて作った。高校は化学部。教室にはストーブがなく寒かったが、部室には実験用のバーナーがあつて暖かった。

京都大学薬学部に。『祇園に舞妓、京都はいよいよ』と聞いていたのに、金がなくて食べるのに精いっぱいだった

大学時代はバンド活動に没頭。演奏よりチケット販売などマネジメント面で能力を発揮した。「とにかく卒業だけさせてください」と教授に懇願し、何とか卒業した。

三共(現・第一三共)に就職。メバロチンという高脂血症治療薬の新薬開発のプロジェクトも任された。45歳で「自分にしかできないことを」と独立し、医薬品開発支援事業を拡大させてきた。

米国の画家キース・ヘリングの作品のコレクションを展示する「中村キース・ヘリング美術館」(山梨県北杜市)の館長も務める。「仕事と遊びは分けません」



幼いときは「ご飯に砂糖をかけて食べるほど偏食だった」と中村和男さん